

## 第7回「日本医師会 赤ひげ大賞」受賞者

■秋田県医師会推薦 おおさと ゆういち 大里 祐一 医師 82歳 大里医院理事長



3代、120年にわたって地域住民の医療・保健・福祉の向上を牽引。「地域医療」という言葉が一般的でない時代から地域住民に寄り添う姿勢を貫き、山間の豪雪地帯を4輪駆動車で昼夜問わず訪問するだけでなく、働いている人たちが受診できるように「日曜診療」も継続している。阪神・淡路大震災発生時には、率先して神戸市の小学校に入り医務活動に当たった他、県会議員を通算5期務め、県の医療政策の策定にも貢献した。

■神奈川県医師会推薦 ちば じゅん 千場 純 医師 69歳 三輪医院院長



「患者さんと家族の気持ちに最期まで寄り添う医療」「頼まれれば断らない訪問診療」をモットーに多施設・多職種と連携の下、在宅医療を実践。在宅医療推進連携拠点「かもめ広場」を開設し、横須賀市と共に、在宅医療の推進に組織的に取り組んできた。また、共助に着目し「支援する」「支援される」関係を構築し、最期までわが家で過ごせるまちづくりをライフワークとして、医院に「みんなあつまるしろいにじの家」を併設し、その実現に向け継続的な挑戦を行っている。

■新潟県医師会推薦 ほりかわ よう 堀川 楊 医師 78歳 堀川内科・神経内科医院理事長



治療困難で生活障害の重い神経難病の在宅療養患者に対する退院後の在宅ケアの重要性を早くから認識し、昭和53年に勤務していた病院に「継続医療室」を開設。ALS等の患者に対する訪問看護と往診を開始し、地域の医師、保健師、ヘルパーと協働の下、在宅医療を提供してきた。その後、訪問看護ステーションと在宅介護支援センター（現在は居宅介護支援事業所）を併設した現医院を設立し、地域における退院後の受け皿の役割を担い続けている。

■長野県医師会推薦 はしがみ よしろう 橋上 好郎 医師 93歳 医療法人 健生会理事長



93歳になった今も現役の医師として、山間部の地域医療を支え続けている。往診を求められればいつでも、どこでも、誰のもとにでも駆けつけ、24時間体制でお産から手術まで対応してきた。幅広い医療技術、知識で住民の信頼も厚く、三代、四代続けて氏をかかりつけ医とする世帯も多い。「患者は家族のような存在」をモットーに身体だけでなく、患者の心も見つめながら一人ひとりに寄り添った医療を実践する村の名物先生。

■熊本県医師会推薦 おがた しゅんいちろう 緒方 俊一郎 医師 77歳 緒方医院院長



球磨郡内に2カ所しかない有床診療所の一つを、6代目として継承。先祖代々、情熱をもって地域に密着した医療活動を実践し、昼夜を問わず、遠い山間部であっても往診を続けてきた。開業当初より嘱託医、校医、園医を担うだけでなく、介護保険のなかった時代に、何度も県庁に掛け合うなど、特別養護老人ホームや介護老人保健施設の設立に向けて奔走した。その他、自院の敷地内に子ども達のための言語診療科を併設し、発育支援も行っている。

## 「日本医師会 赤ひげ大賞」について

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、公益社団法人日本医師会と産経新聞社が主催となり「地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当てて顕彰すること」を目的として、平成24年に創設したものである。

【後援】厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ

【特別協賛】太陽生命保険株式会社

### 【対象者】

病を診るだけではなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会の会員及び都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日医・都道府県医師会役員は除く）。

### 【推薦方法】

各都道府県医師会会長が推薦（原則1名以上2名以内）

## 選考委員

羽毛田信吾（昭和館館長、宮内庁参与）

向井千秋（宇宙航空研究開発機構特別参与、東京理科大学特任副学長）

檀ふみ（女優）

ロバート・キャンベル（国文学研究資料館館長）

吉田学（厚生労働省医政局長）

小玉弘之（日本医師会常任理事）

城守国斗（日本医師会常任理事）

松本 肇（産経新聞社取締役）

河合雅司（産経新聞社論説委員）

（敬称略）

### 【表彰式・レセプション】

平成31年3月15日（金）パレスホテル 東京

表彰式：午後5時～ 2階「葵 東」

レセプション：午後6時～ 2階「葵 西」